

図案・下図に見え隠れするもの

金沢学院大学美術文化学部教授
山崎 達文

宗桂会では、財団ゆかりの加賀藩白銀師山川孝次家に遺されてきた、金工図案・下図類の資料を多数所蔵する。一部は宗桂会館で展示替えされながら常設紹介されている。平成10年4月末から6月にかけて開催された「加賀象嵌下絵展」では、実作品に対応する下図や図案が併陳されて、作品製作の構想過程を垣間見ることができた。

以降もその整理保存作業は徐々に行なわれており、昨年は資料の写真撮影が大いに進捗したことを受けて“誌上金工図案展”開催のご下命を帯びてしまった。以下は、相当にリキを入れて描かれた図案を“展示”しながら、その背後に見え隠れする事象などをあれこれと考えてみた“下図”です。

入館無料、どうぞ覗いてみていって下さい。



西王母置物図案



西王母置物本図草稿



草花図案三種（六種のうち）

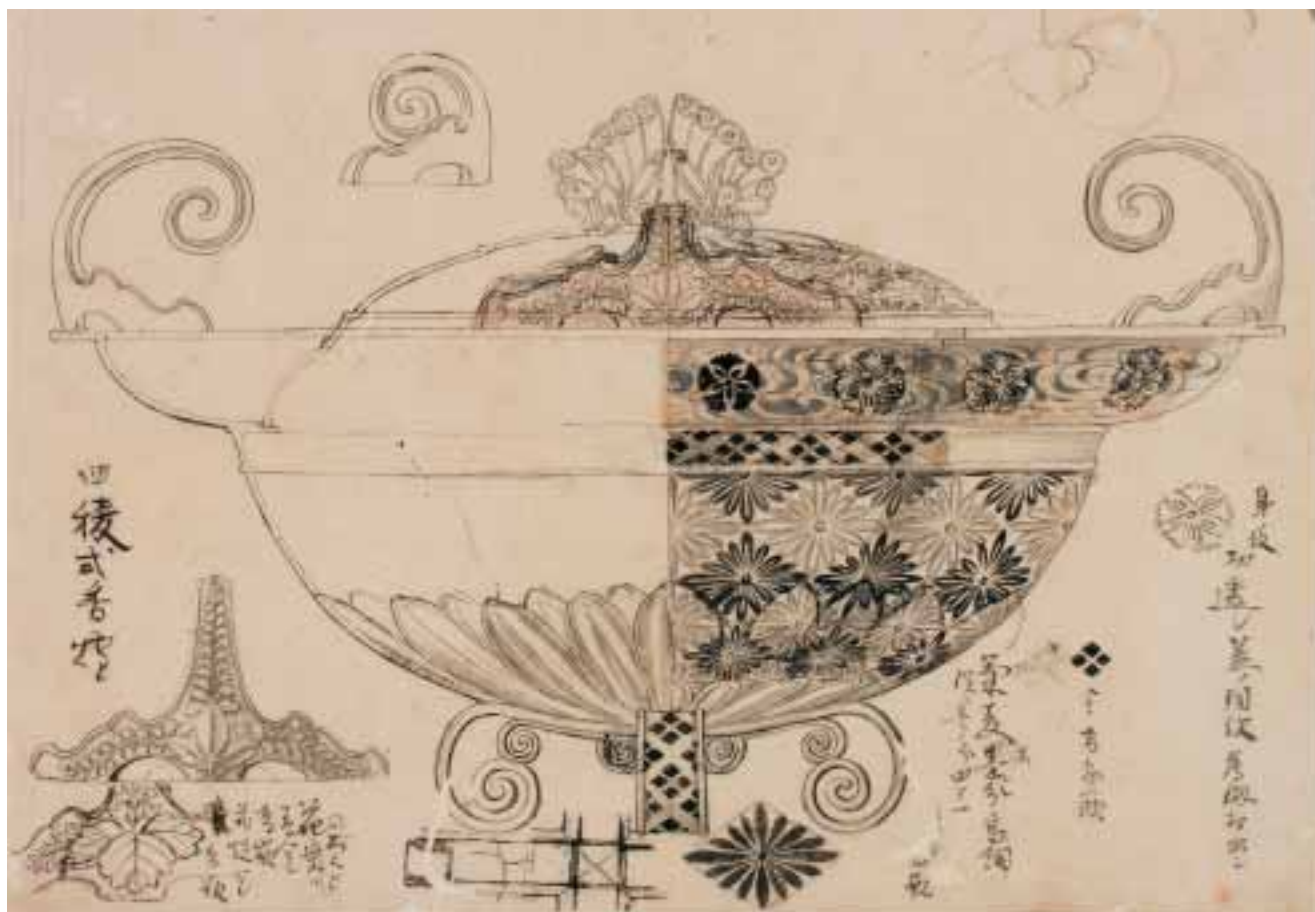
径36センチ程の草花図で、春の草木や秋の草花を取り合わせて昆虫をあしらう。同種のものが6枚違って、いずれも筆致は繊細で淡彩を施す。明治中頃のものが。寸法などからは、この図案を附すべき対象となる器物を想定しにくい。彫金・象嵌技法を駆使した金工による“美術作品（絵画）”として意識されたかも知れない。

図案は実作として再現可能か？

遺された図案類を眺めていると、作ろうとするモノの構想と言うか、文字通り案として描かれたものと、完成予想図、または完成されたモノの記録、今なら作品写真としての性格を帯びるものがあるように見える。だが、その双方を備えているような感じのものもあって、そう簡単に割り切るわけにもいかない。また、同一図案が幾様にもアレンジされたり、ラフなタッチのものは実際の製作にあたってのエスキースなのだろう。こうしたものの多くは、実作者の山川自身によるもので、

下図と言ったほうが解りやすい。

筆の運びも端正で精緻な、美しい大きな着彩草花図案は、相当な力量をもってかなりの労力を費やさずには描けるものではない。これだけでも飾って鑑賞していたい価値はあるだろう。ところが忘れていけないのは、この図案は、これを元に彫金象嵌してゆくための指示図なのだから、よく描いてあるなどとこれでご感心してはいけけないのだ。山川さんにも失礼にあたるだろう。この図案、実際に製作に移されたか否かはわからない。だがここでは、山川孝次はこのような象嵌意匠に取り組む意欲を持っていたし、この表現のために必要となる相当に高度な金工技量を備えてもいたこと



銀製四稜式香炉図案

この香炉は丸みを帯びた菱形をしているのだろう。日本のカタチではないことを考えると、明治後半期のものではないかと思われる。そこに日本の伝統文様が精緻を凝らして盛り込まれ、いささか洗練さには欠けるきらいがあるものの、妙にエネルギーな迫力がある。

に想いを馳せたい。勿論これをモノした可能性は充分にあるし、見つけ出せばお宝である。

明治期、特に海外の博覧会出品を意識した金工図案のなかには、果たして本当に実作として再現可能なのか？ との素朴な疑問も湧くほどにとんでもなくスゴイ図案がある。こうした工芸図案類が国内で再発見されだしたのは近年のことで、それら図案と一致する実物作品が欧米所在のものを含めて確認されるにおよび、マジで作っていたんだ！ということが解ってきた。長く埋もれていた山川家の図案類も、丁度この時期にタイミングよく整理され始め、こうして世に紹介される機会が得られることを、描いた人たちのためにも喜び

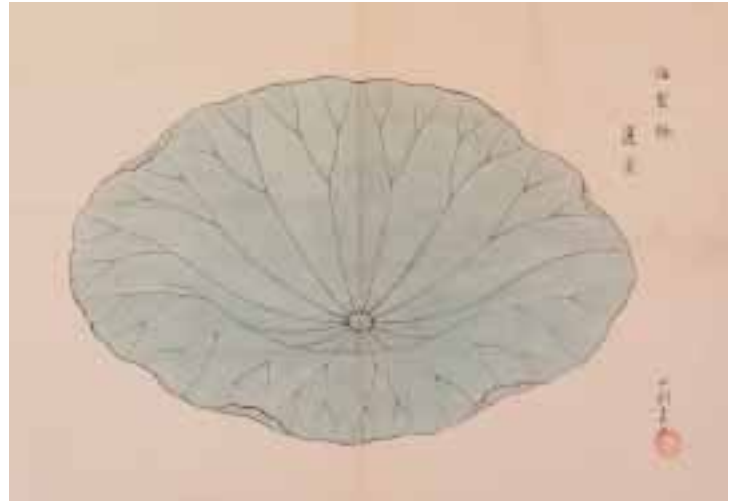
たいと思う。

**明治工芸のモチーフが明快で
解り易いわけ**

と言うのも、実はこれらの図案は、先に触れた下図のようなものを除き、多くは専門の画家によって描かれていたのだった。今日、作品の形態や加飾は自らが構想すべきもので、そこにこそ創造性や作家の個性というものが凝縮されているのだ、という風に考えられている。それが芸術というものだ、と。けれども、そうした西欧の美術概念が日本にもたらされて浸透してゆくには、少



銀製屏風押図案



蓮葉銀製鉢図案



蓮葉銀製鉢図案（側面）

なくとも大正期までの時間が必要だった。

明治初頭、政府は世界にニッポンの存在をアピールすべく万国博覧会参加を決定し、在来製品のなかから、今言う“工芸”を出品することにした。そうは言っても、工人には何をどう作って送り出せばいいのかまるで指針がない。山川家にしても、加賀で刀剣装具の世界にミクロの表現技巧を競っていたのだから。

なにせ手工業しかなかった当時、工芸品は最重要輸出産品であったから、図案はモノづくり指南図としての重い機能を付託されたのだった。とりわけ、そこに込められるべき文様意匠が問題で、これぞジャパンという印象を欧米に売り込む必要

がある。だから、輸出工芸図案には“日本らしさ”の横溢が必須条件になった。それは花鳥風月であり、武者絵であり、また中国絵画の伝統を含む故実文様や吉祥文の数々であった。そしてそれは成功し、極東の小国ニッポンは驚きをもって西欧社会の関心を集めてゆく。

日本のフジヤマ・ゲイシャ的イメージの発端も、もとをたどればこの辺りにあるのだろう。それはともあれ、明治工芸のモチーフが明快で解り易いにはこんな事情がある。





鶴首船形釣花瓶図案（山本光一画）

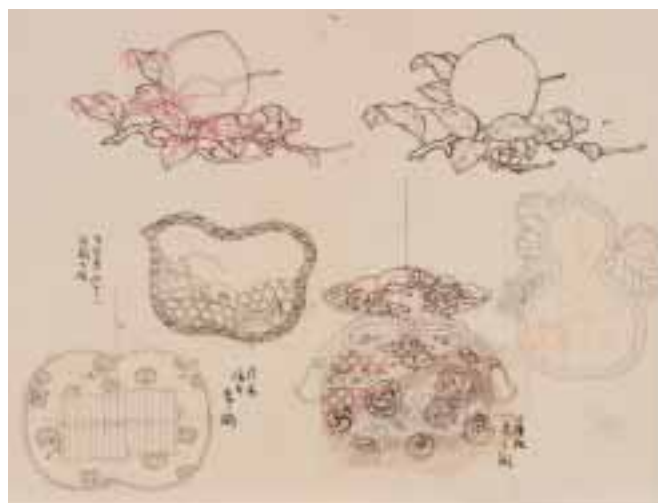


「靖々案」朱印

釣花瓶図は、朱印から光一の“案”になる図ということになる。右下に山川孝次とあるのは、この著作権は孝次にあるという意味だと解釈される。図案の中にある記名や山川印は、そのまま図案の自筆を意味しない。



かんざし図案



引手・釘隠金具図案

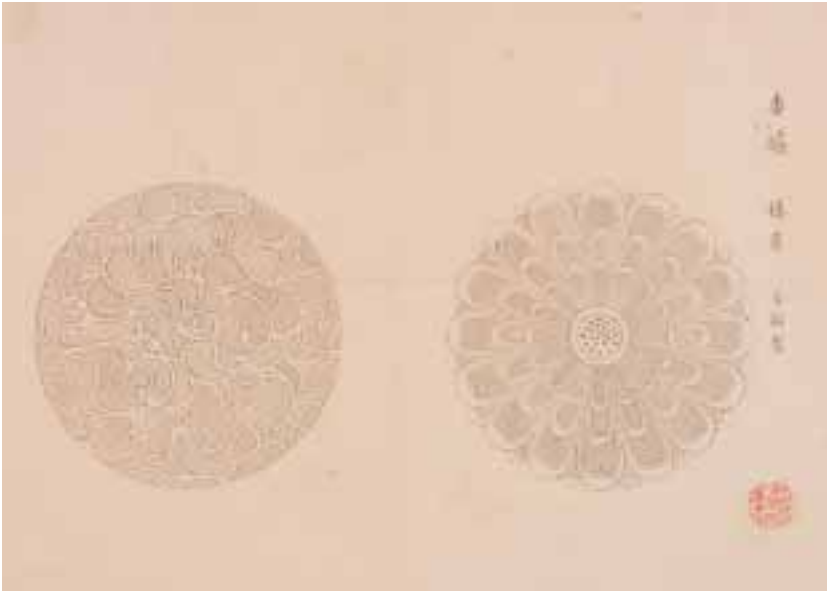
日本画家による図案作成の始まりと山本光一という人

製品画図掛という部署が内務省に置かれ、政府による図案作成が始まるのは明治9年のことだ。集まった画家（今で言う日本画家）たちは唐突にテクノクラートとなったわけで、のちに図案家と称される権威ある地位のさきがけともなった。

工芸図案を手懸けた画家の一人に、江戸琳派の系に連なる山本光一という人物がいた。正確な生没年も来歴も不詳ながら、天保から明治36年（？）まで生きた人^{きりゅう}のような人だ。明治7年開業の半官の製造貿易会社、起立工商会社で、9年頃から中心的

画工として活躍していたことが知られている。明治25年、石川県での足跡が初めて認められるのは、東京にあった会社が24年に閉鎖されたことに連動しているに違いない。

船形釣花瓶はこの人が描いたもので、左下にごく小さく「靖々案」と朱印がある。画家は、靖々光一と号した。尾形光琳が“靖々光琳”としていたことに倣ってのことだ。明治25年から10年ほどの間、金沢を拠点として、加賀地域や富山県高岡あたりでの動きが少し解ってきた。この図案例のように、光一の手になることが明らかなものは稀だが、こうした工芸図案などをもって生業としていたらしい。冒頭ご紹介した精細な草花図も、光



- () 赤銅製香炉ほや図案
- () 銀製杯楓に鹿図案
- () 胡瓶図案

香炉のほや、銀製杯などは頻りに注文があったに違いない。日常的な仕事は、こうしたものや、かんざし、帯留といった装身金具、文鎮など数ものの記念品や七宝品まで、細ごまとした品々であったろう。山川孝次が活躍したのは、生活の中に大いに金工品が満ちていた時代であった。

ペルシャ風水注の図案は、古拙な形姿から明治前期のものと思われる。

一のものではなかろうかと思われる。確証はないものの、その筆勢や昆虫のあしらい方などは、他の光一の描いたものに近い。

昭和前期に京都画壇で重きをなし、今日でも知名度の高い日本画家に、富山県福光出身の石崎光瑠がいる。この人は明治29年に12歳ほどで光一門人となり、翌年、光瑠の号を授かった。戦後活躍した岡本光谿、能川光陽といった金沢の友禅作家も、光の一字をもらっている如く、この地域での作家養成にも功があった光一は、当時としては相当な実力者だったが、今では全く忘れられてしまった。皮肉にも、光瑠の師、ということにわずかにその名を留めているようなところがあるばかりだ。あえ

てこの人に触れておきたかった所以である。

図案と実作との間にもたらされた効果的な緊張感

ここでは、日本画家が描いたとおぼしい図案を中心にご紹介した。これらを元に工人が作品に仕上げるわけだが、明治の前半は、工人の技より図案の方が重く捉えられていた。

図案はもともと輸出工芸品の仕様図として構想されたシステムで、そこに仮託されるニッポンの矜持の表出には、画に対する高い見識と描写力が必要だったからである。



祥瑞形花生模様

手塚治虫の『火の鳥』を髣髴とさせるような、神々しく威厳に満ちた図案。実作があればおおぶりで見事なものだろう。

思えば、図案がどんなに精緻であっても、実作し得ないものはなかったろう。当時、作れもしないものを描くほど、図案はお軽い扱いのものであったはずはないのだから。その意味で、画家は製作にかかる工芸技法をよく理解していたものと思われる。作り手の現場感覚や技能の特性を知らぬまま、恣意的に好みの図案意匠を展開したのでは決してない。

そうして描かれた図案に、例外なく、律儀で真摯な取り組み姿勢が色濃く表れているように感じるのは私だけだろうか。作り手にとってみれば、これを受けて難しければ難しいほど、やってやろうじゃないの、と製作のボルテージを高めずには

いられなかったのではなかろうか。両者の間には、お互いそんな丁丁発止の関係があったのではないかと想像する。

そう見れば、両者がうまく機能して噛みあう時期は短かったけれど、明治工芸が醸し出す、ちょっとバタ臭くも力強い不思議な存在感は、このようにして可能だったのか、と思いいたる。

これらの図案は、何かもっと様々なことを言いたがっているように見える。しかし、遺憾ながらこの“誌上展”では、充分にその声を聴き出すことができなかった。今後以期しつつ、ひとまず閉会としたい。

ご観覧いただきありがとうございました。